

連載 オブジェクト指向と哲学

第 75 回 時間と空間(9) - アリストテレスの時間論

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

「左右」は言葉で説明できないが誰でも体で覚えていて日常生活に支障はない。今回は「前後」という言葉について少し考えてみたい。この言葉は「左右」と違って空間と時間について使われる。時間は過去・現在・未来で軸は一つしかないので、2次元で方向を示すのに必要となる「左右」は適用できない。

●前後の意味

「前」は広辞苑には

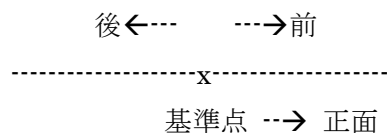
- ① 物の正面に当たるところ。(詳細 11 項目)
- ② ある時点より早いこと。(詳細 5 項目)
- ③ その他 2 項目

合計 18 項目の意味が挙げられている。ちなみに明鏡国語辞典には名詞 15 項目と接尾後 2 項目挙げられている。いずれも多数の説明があるが、大きくは空間と時間に分かれる。

空間の前後は実感として疑問の余地はありませんが、時間の前後は空間と反対のように見えません。

(1) 空間の前後

空間の場合は「物の正面に当たるところ」が前です。



(2) 時間の前後

時間の場合は「ある時点より早いこと」が前です。つまり過去が「前」で未来は「後」になります。

前←--- ---→後
-----x-----
過去 ←--- 基準点 ---→ 未来

時間の流れる先である未来の方向が「後」で過去が「前」です。未来は時間の進行方向としては前方ですが、1 時間後とか1 年後とか後方のような言い方をします。

電車の窓から景色を眺めると前方の景色が後方に流れてゆきます。過ぎ去った景色は前に見た景色となります。時間が経過するほど遠い前に見た景色、位置としてははるか後方になってゆきます。つまり位置としては「後」の景色は、時間的には「前」に見た景色となります。

●空間の前後と時間の前後

渡辺慧「時」に空間の前後と時間の前後の議論があります。

『どこの国語でも、前後という言葉は空間的と時間的とに用いられている。(省略) この二つの前後関係は運動を媒だちとして結ばれていること明らかである。』[1]

『運動は相対的であって、こっちが進むことと、向こうのある物が来ることは同じである。そこで、時間を何か向うから来る対象物とするとき、未来とはその対象物の後方にむすばれる。すなわち未来を「後」に結びつける考え方は、時間の客体化、対象化の結果であるといえよう。これを我々の側から見れば、時間のいわば受動的形式である。しかしこれは、全くの同一の相対運動、自他の距離の近づく相対運動に由来するものである。』[1]

(1) 基準点は不動、受動的

前←--- ---→後
 ←===未来が向かってくる
-----x-----
過去 ←--- 基準点 ---→ 未来

(2) 基準点が未来に向かって進む、能動的

後←--- ---→前
 ===→未来に向かって進む
-----x-----
過去 ←--- 基準点 ---→ 未来

例えば映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」ではタイムマシンに行きたい時間を入力します。未来へ行く時は時間を前に進める。能動的な(2)の考え方では未来を後とは言わない。後は過去です。

●よりさき、よりあと

アリストテレスの「時間論」は、自然学第 4 巻「場所論」の次に論じられています。アリストテレスは時間と運動は密接な関係があるとしています。

--

変化を知覚し区別するときには、われわれは時間が経過したというのであるとすれば、動と変化なしには時間は存在しないことは明らかである。[2 218b30]

--

運動は位置関係の変化につながります。そこでこの 3 つ「位置関係」「運動」「時間」の対応を考えます。

--

「よりさき・よりあと」という区別は、第一義的には、場所において成立するものである。ここでは、位置関係によってそれがきまる。しかし、〈大きさ〉(場所的なひろがり)において「よりさき・よりあと」ということがある以上、必然的にまた、〈運動〉においても「よりさき・よりあと」ということが、〈大きさ〉のばあいと類比的に対応しつつ、成立しなければならない。そしてさらに、この「よりさき・よりあと」は〈時間〉においてもあることになる。[2 219a10]

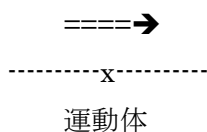
--

この〈大きさ〉は「場所的なひろがり」とあるが、ここでは運動や時間との対応が述べられているので「長さ」の方がわかりやすい。〈大きさ〉における「点」は、〈運動〉における「運動体」に、〈時間〉における「今」に対応する。

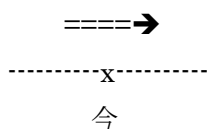
<大きさ>

=====
-----x-----
点

<運動>



<時間>



--

両端にあるものがその中間とは別のものであるとわれわれが考え、<今>が二つある---一つはよりさきの<今>、一つはよりあとの<今>---と心が語るとき、まさにそのようなときに、そのものをこそ、われわれは<時間>であるというのである。というのは、<今>によって境界づけられるところのものが<時間>であると思われるからである。[2 219a30 の前]

--

<今>という時点は時間ではなく、二つの時点の経過時間がアリストテレスの<時間>です。

--

<時間>とは、「よりさき」と「よりあと」の区別にもとづく運動の数であり、そして連続的な性格のもの（なぜならそれは、連続的であるところの運動の数なのだから）であることは、明らかである。[2 220a20]

--

これは<大きさ>の長さ、<運動>の移動距離を<時間>の長さに対応させています。

以下次回...

参考書籍

[1]渡辺慧、時、2012、河出書房新社

[2]【編集】田村松平、世界の名著 9 ギリシアの科学、1980、中央公論社